



2011.08.21 発行同人誌「Make a Secret」  
の番外編的位置づけの短編集です。本編を  
読んでなくても無問題です。読んでいると  
より楽しいかもですね？ などとさりげなく  
宣伝しておきます（さりげなくない）

珍しく一段（A6）だったりするのは、ちっ  
さいサイズの無配本とか作りたいナーと画  
策して段組した名残。

いつも通りの暢気な話ばかりですが、  
ちょっとしたおまけ程度にお楽しみ頂けれ  
ば幸いです。

SOULEATER SOUL X KID FANBOOK  
"Make a Secret"  
extra chapter



# Girls Shopping

女二人のショッピングに、珍しくつきあってくれるって言うからまあ、荷物番とお財布係をキッドには担って頂いていたのだけだ。

いつもなら、うんざりした表情で座って待ってるだけのキッドが、どーしたことからそわそわとショーウィンドーに目を走らせてなどいるもんだからこう、なんか、乙女のカンっての？ とにかくピピッと働くもんがあつたわけよ。

「はー、キッドもそういうお年頃かあ」

背後からぽんと叩いた両肩が、ほんの僅かだけぴくつと跳ねたのは、不意を突かれたってことだろうと思う。常に周囲に気を張っているはずのキッドなら、まあありえない、らしくもない有様だけど。自分の世界に入り込んでる時ってのは大概そんなもんだわな、うん。

「……リズか。買い物は終わったのか？」

精一杯平静を装っているところが、いじましいなアなどと思いつつ、気付かない振りをして、にっと笑う。

「んーにゃ、まだ」

「それだけ買って、まだ買うのか」

私が両手にぶらさげた、大きなショッピングバッグの束をみて、キッドが眉を顰める。またぞろ『流行を追いすぎ』だの『収納をもっときちんと』だの言いだすと長いので、その煩い口を開く前に素早く本題に入ることにした。

「コッチは終わったつてば。……けど、キッドの服がまだじゃん」

「……は？」

「どっか遊び行くつつつてたろー、来週だっけ？」

誰と、というのは言わないでおいてやった。なんとなく。

伏せている様子でもないのだけれど、うちのボンボンはともかくとしても、向こうさんはわりと繊細でいらっしやるようだからして。

うっかりお義父様の耳にでも入ったら色々と（魂とかが）ヤバイかもだしな、……なんて思うと逆になんだか、口がムズムズしちまうのが困りものではある。

そんな私の言葉にしばらくきよとんとした顔でいたキッドは、しかしやがて居心地悪そうに眼を伏せた。

「いや、……俺は別に」

「えーっ。なに、いつものスーツで行くって？」

「……問題はなかるう」

「アリアリ、大アリだっつーの。季節感ゼロ、遊び心ゼロ、ついでに彩りもゼロの三拍子な」

「しかし、」

「いーからいーから、私らにまかせとけって。ばーつちりトータルコーディネートしてやっからさー！」

「お前らがか」

「……そんな嫌そうな顔すんなよ。あーはいはいわかってますよ、シンメトリーなやつならいいんだろ？ ……あ、戻ってきた。おーいパーティー。キッドの服見にくぞー」

「ほーい」

そのままパティと二人、渋るキッドの両脇をがしつと抱えると、ずるずると引き摺るようにして歩く。

何を迷ってるんだか知らないが、だいたいデートってなあ非日常感を楽しむもんだろ。いつもの恰好で、なんて空気読まないにも程がある。

と言つてもキッドに『空気を読め』と強要することの虚しさを、知らないやつもあまりないっちゃいないが。……ま、そのために私らがいるワケだよな。ご主人様の苦手分野を、補って支える優秀に過ぎる武器だよホント。

などともいいことを考えつつ、シヨッピングモールをぐるりと見渡す。

買うと決めたなら早いほうがいい。なにしろキッドの品定めには異様に時間がかかるからなあ、シンメトリー的な意味で。

「どーすつかなあー。ストリート系なんかは似合わなそーだし、けどあんまりモードっぽいのも……ちよつと可愛い目ぐらいのがいいかねえ」

「オツケ〜！ ひあういごー」

「……おい！ 引つ張るな、パティ！」

そうやって張りきってマスターを引き摺っていたパティが、「おおっ」と何を発見したのか声を上げる。

「ほらあの店。なんかキッド君の好きそーなグッズ置いてる！」

「何、——つて、ふざけるな！ そっちは明らかに、レディースブランドではないか！ それぐらいは俺にだって分かる！」

楽しげな声につられるようにして、ショーウィンドウに目を走らせたキッドが、たちまちその声音を怒りに染める。

パティの指差したストアには、骸骨だの蝙蝠だの蝋燭だの確かにそれっぽいものがディスプレイされていて、但しマネキンが来ているのはレースリボンを多彩に施され、豪華な妖艶さと可憐さがあまった、ごてごてしたドレス。

……所謂、ゴシック・アンド・ロリータ、ってやつだな。

「ほえ？ だつてほらあのふりふりフリル、すつごく可愛いよー」

「いやパティ……、確かに、可愛いかもしれないけどさあ」

どこまで本気なのかよくわからない我が妹に、微妙にひきつった笑みを向ける。

またキッドときたら死神のお肌効果で色は白いし、男にしちゃまあ線も細い方だ

から、着せたら妙く似合っちまうんだろうなあ、などと想像したら咽喉奥から変な笑いが漏れた。

……いやいや、傍で見てる私らは面白いからいいんだけどさ。

「さすがに初っ端からロリータファッションは、あちらさんもハードル高えんじゃないのかなーって、お姉ちゃんは思うわけよ」

「うーん。ゴスロリより、甘ロリ？」

「そーいう問題でなく」

「ええい、最初も最後までそんなものはない！ ……さてはお前ら、完全に遊んでやるだろう！」

掴まれた腕を振りほどき、怒鳴るキッドに「あ、ばれた」とパティが舌を出し肩を竦め、私は私でキッドがホントにこれ着てデートに行ったなら、お相手はどんなオモシロ百面相するだろうか、と考えるだに笑いが止まらないのだった。

そんなこんなでモールを出るころにはすっかり日も落ちていて。



「……結構、大荷物になっちまったなー」

タクシーを待つ間、流石に少し疲れてベンチに座り込む私とは違い、まだまだ体力有り余った様子のパティが、今日の戦利品がたっぷり詰まったショッピンングバッグを、大事そうに抱えてはしゃぎまわっている。

「つたく、……まだ来ないのかよー。おっせーの」

「なら、歩いて戻るか？」

「これ全部抱えてあの距離歩けてか？ 冗談だろ！」

「わたし平気だよ？」

「勘弁して……お姉ちゃん、あんたらと違ってか弱い乙女なんだから」

なにを情けない事を、と洗面を作ったキッドの横で、パティがくるくるとおどけてターンして見せる。危うく接触事故を起こしそうになったところで、身をおかわしたキッドが少し苦笑交じりに呟く。

「屋敷まで、届けてもらえばよかろうに」

「えー、やーだあ。帰ってすぐ、ファッションショーしたいじゃん？」

「ああ、なるほどな」

「キッドくんも一緒にだよ！　ね、お姉ちゃん」

「俺もか……」

三つ分の視線が足元に落ちる。そこには私たちの戦利品に混じって一つ、メンズブランドの大きな紙袋。

「もちろん」

結局、私が頭から足まで選んでやったんだから、その成果はぜひ披露してもらわないとだな。まったく、……手にかかるマスターだこと！

「……そう、だな」

パティに絡みつかれながら、キッドが少し照れたように笑う。それは屋敷に帰ってからの騒がしいひとときを思つての笑みなのか、それとも。

アイツにしか見せない顔もあんのかなあ、なんて件のデートのお相手のことを思つてしまつてふと、どこか感傷的になつている自分に気付く。手にかかるボンボンの世話係。一人増えれば負担は分散、仕事が減つて大助かりだ、つてのにさ。なんだろうね、この感じ。胸のあたりがなんだかモヤつとするような気もするし、……

逆にスースーとやけに風通しがいいような気も、しないではない。

「……？　なんだ？」

「んー」

纏わりつくパティの腕を払ったキッドが、私の視線に気づいて振り返る。

……うん。さつきより全然イイ顔してる。やっぱ、シンメトリー以外の事で悩んでるキッドなんざ、らしくないわな。

私らにできる事といたら、せいぜい彼が『らしく』いられるようにサポートしてやることぐらいだ。何も変わりやしない。今までも、これからも。

そう自然に思えたら、変な蟠りはスつと音も無く消えた。

「なんでも。……私も早いとこ、彼氏作ろっかなアってさ」

何かを成し終えた後の心地よい疲労感とともに、ベンチから腰を上げる。

なんか恋でもしたくなっちゃったわー、と大きく伸びをしたところで、「今度は続くとイイね！」という我が妹の容赦ない一言。うっ、と思わず足元がよろけた。：

……いやあー、無邪気って時に残酷！

「しつかりしろ、……ほら」

私の腕を支えたキッドが、まったく仕方が無いな、と呆れた風に言う。

「痛ってー。靴ズレしてる」

「慣れない靴を履いてくるからだ。ヒールも高い。だから重心が不安定になるんだろ」

「いーじゃん。脚力強化に役立つてんだよ」

「この程度でふらつくようでは、それも怪しいな」

そうしてまた、つまらない説教が始まるのだ。え？ もっと動きやすい服装？ 咄嗟の事態ってなんだよ。てか武器化したらいいじゃんそんな時は。ああもうほんと口煩い、お前は私の保護者か、つての。

そういうところは変わってくれてもいいんだけどなア、などと思いつつ昔より少しだけ位置の高くなった肩に捕まり、サンダルストラップを緩めて私は小さく溜息をついた。

## >Girls Shopping

新刊表紙のキッドの私服がかわいくてです。あの服は姉妹が選んであげたのだ、という設定を投下頂いた、よねもり夕子さんへ勝手に捧ぐキッド組の休日。デート前。

普段通りの服装で行こうと思っちゃうのも平常心を保ちたいがため、だったりするキッドもかわいいんじゃないかと。

あとブーツインなソウルは文句なく最高です（関係ない）。最高です（二回言った）。



## 素晴らしき日常

時を経て黒く煤けた鉄門扉をくぐり、聳え立つ死刑台邸を見上げる。昼日中の明るい空をバックにしてなお、時代遅れのホラー・ムービーに出てくる古城のような雰囲気のあるそれに、軽く威圧感を覚えながらもエントランスへの階段を上る。

開かれた扉と、キッドの嬉しそうな顔にふつと緊張が緩むのを感じながら、「おじやましまーす……」とややトーンを落とした声で挨拶をしつつ、外の気温関係なしにいつでもひんやりとした空気の流れる邸内に、俺は足を踏み入れた。

「何もないが、寛いでくれ」

と告げたキッドの言葉通り、キッドの私室はほんとになんというか、娯楽らしきものが見当たらなかった。普段の彼がここで一体どんな風に過ごしているのだから、想像の足がかりとなるものを求めて何気なく本棚に目をやる。並んでいるのは大方

の予想通り、お堅い書籍が大半だ。魂学の教本に文献、見知らぬ言語の辞書だのに目を滑らせつつ、見つけた娯楽小説のようなものが何か意外で手に取ってみる。

「……なんだ、気になるのか？」

「ん？ いや、」

アイステイを二つ、トレイに乗せて運んできたキッドが俺の手にした本に視線をやって、興味があるなら持つて帰っても構わない、とグラスをテーブルに置きながら言った。「サンキュ」と取り敢えずは礼を言い、日に焼けて軽く変色しているその本を棚に仕舞おうとして、なんとなく気になりパラパラと捲ってみる。

「お前もファンタジーものなんか読むんだなーって……なんだこりゃ。ジョーク集か？」

「分類上は、哲学書になるのだろうか」

ファンタジーと名のついたその書籍は所謂幻想文学的なものかと思いきや、よく見れば確かにタイトルに **philosophical** と入っている。中身はといえば結末を明示しない逸話やジョーク、パラドクスの類で構成される短編集のようでもあった。

「軽妙な語り口の逸話の中にも、認識論や存在論といった哲学の基礎的命題が盛り

込まれている」

「はア」

「ソウル。娯楽的な読み物もいいが、偶には学術的な色合いの書物に目を通すことも有益なことだと俺は」

「はいはいはい、ご高説どうも」

「……。哲学に興味がなくとも、比較的読みやすい方だと思うぞ、それは」

確かにキッドの言う通り、テーマ自体は重そうだが、内容はショート・ショート的で一般的な学術書に比べればかなり取っつき易そうではある。

僅かに迷って結局、じゃア借りて帰っかな、などと言ってしまった。実際、多少興味を引かれたからでもあるが、話を打ち切った時のキッドの表情が実に分かりやすく不満気であり、かつ少し寂しげにも見えたせいでもある。……ま、知識共有は円滑なコミュニケーションの基本だよな。

「お前のオススメにしちゃ、まだマトモだし」

「心外だな。俺がまともでないものを勧めたことがあったか？」



誰の常識で照らし合わせれば、『数式世界にみる左右対象』だの『世界の代表的シンメトリー建築物』だのがマトモの部類の入るんだかは知らないが、そんな不毛な議論をする気は勿論ない。

無言で肩を竦めた俺に、キッドは少しだけ唇を尖らせる。とはいえ本気で気を悪くした訳でもないのだろう、やがて不服そうな表情はふっとほどけた。代わりに浮かべたやわらかな笑みに、軽く胸の高鳴りを覚える。ただただそれだけのことで、もう平常心を保てなくなる自分に、少しばかり呆れはした。

……落ちつけよ。こんぐらいでドキドキして、どーするってんだ。

「……で、今日は何の用だ？」

キッドの言葉で、はたと我に帰る。そうだ、俺は別に本を借りに来た訳じゃない。意識した途端、口内が妙に渴くのを覚え、曖昧に言葉を濁すと、出されたアイスティに手を伸ばした。

カラン、と涼しげな音がしてグラスの中の氷が揺れる。恐らくキッドが丹念に茶葉を計って抽出したものなんだろう、風味がいつも飲んでいるものとは段違いだ。

繊細で軽やかな口当たりに軽く驚いて「美味しいな」と何気なく呟いた俺に、キッドはわが意を得たりと言った顔で頷いた。

「春摘みのものは何より香りが良いからな。パティが、紅茶は渋いのが嫌だと言うから、水出しで苦みが出ないように淹れたんだが……」

そのままファーストフラッシュとセカンドフラッシュの、味と香りの違いについて話し始めるキッドに、ふんふんと相槌を打ちながらアイステイを啜ったストローを囁む。暑い訳でもないのに咽喉はやけに渴いている。キッドの言葉を右から左に聞き流しながら、滑らかに動くその唇に視線を留めて、別のことばかりを考えている。咽喉を潤した紅茶の味は、もうよく分からなくなっていた。

（落ちつけて、）

胸の内で繰り返して、ストローから口を離す。

小さく深呼吸して息を整え、真っ直ぐにキッドを見据える。一頻り話し終えたキッドが、視線を受け止めて穏やかな表情のまま軽く首を傾げ、俺の言葉を促した。

「あのさ」

「うん？」

「今日は、その」

「うん」

「……続きを、だな」

掠れた語尾を聞きとれなかったか、キッドが軽く眉を顰めた。それだけで、何かを咎められているような後ろめたさを覚えるのは俺自身の、抱えたやましい気持ちのせい、なんだろう。

ああもうなんだって今更、こんなに緊張してんだよ俺は！

自分を叱咤しながら、いつのまにか乾いてしまった唇を舌で湿す。

邸内はしんと静まり返っていて、いつもなら聞こえるはずの姉妹の声も足音も、気配すら感じない。そりゃそうだ、誰かさんと違って俺は、あいつらが今日、家を空けていることを知っている。恐らく夕刻までは戻らないであろうことを把握したうえで、キッドに会うためあの重厚な門をくぐったのだ。

恋人と良い雰囲気になったところで部外者に面白半分には乱入される、なんてぬるいラブコメみたいなマネをやるのはもう、今回ばかりは御免だからな。

そうだ。俺は今日、ある種の決意を固めてここへ来た。それはつまり、あの日未遂に終わったコトの続きを、——有体に言ってしまったえば、恋人とセックスをしようと、いうこれ以上はない下心を持って訪れた、のだった。

「……………」

切羽詰まったような、COOLじゃない顔をしていたのかもしれない。黙ってしまった俺を少し戸惑ったような表情で、見詰める金色の瞳にはおよそ疑念というものがない。なさすぎて逆に困る。ついこのあいだ、色々あった後だったのにこの坊ちゃんは、つとに警戒心が足りないというか何と言うか。

それはどうやら自分のテリトリー内に於ける心理的優位性からくるもの、だけではないなさそうだった。それは俺に対する相応の信頼。あるいは未だ、互いがそうだったコトの対象であるという意識の欠如。そのどちらもがありそうであり、改めて歩む道のりの険しさを認識し、軽く頭痛がする。

翳りなく、純粹な澄んだ瞳がいと美しい。そんな思いと相反するような欲望を、抱かずにはいられない自分に、押し掛かる背徳感が重い。

……いやいやいや。健全な肉体と健全な精神を持つてるやつなら誰だって、好きな相手とより深く繋がりたい、身体的交渉を持ちたいと思うのが普通だろ。親公認の清いお付き合いなんかよりそっちのほうがよっぽど、健全じゃあるまいか？

などと自分に言い訳めいたものをしながら、放っておくと何でもかんでも上司兼父親に報告してしまいそうな恋人の、瞳をじっと見詰め、その手を取る。

ささやかな接触で意識する。すらりとした節の目立たない指、透けるような白さをもつその手は、しかし少女のよう華奢でもたおやかでもない。銃を扱うとは到底思えないようなこの手の持ち主もまた、俺と同じ男であるのだと。分かっているとなお触れたいと思ってしまうのは、既に『普通』や『健全』の範疇じゃあないのかもしれない。

それでも、だ。好きだからこそ欲しいと思うこの気持ち、俺は否定する気にはなれないし、受け入れてほしいとも強く願う。

……つつーか、少しは空気で察してくれりゃあ有難いんだがなア、とそういう方面には至って非協力的な恋人の手を、握る手に微かに力が籠る。

願うだけでは何も得られはしない。手にしたいと欲するなら、自ら掴み取るしかないんだ。

そんな大仰な決意を胸に、すう、と軽く息を吸い込む。

「この間の、続きをつ……」

しよう、と言いなながら視線を巡らせた、一人用にしては贅沢すぎるほど広いベッドの一部が、不自然な膨らみを見せていることに、何故俺は今の今まで気が付かなかつたんだろうか。

「続き？」

「ああ……うん……あの、ちよい待て。……アレ、何」

この部屋に通された時に、真っ先に気付いてもよかつたような、こんもりと盛り上がったシート。そこへ目が行かなかつたのは、ひとえに『コトを成す』と意識し過ぎていたが故、視界に入れられなかつたからに他ならない。

「ああ」

俺の視線を辿って同じようにベッドの上を見遣ったキッドが、その膨らみに気づき、さして驚いた様子でもなく呟く。

「父上か」

「?!」

……口から心臓が飛び出るかと思ったぞオイ。

今この場で一番聞きたくない単語をさらりと口にしたキッドが、つかつかとベッドに近寄りシーツをばさりと捲る。

果たしてそこには、死神様が随分と小さく丸まって隠れて……いたわけではなく。

「……………それって」

「あの時、ソウルがくれたものだな」

それはあの遊園地デートの際、俺がハンマー・アトラクションに挑戦して取ってやった景品、死神様を横つたぬいぐるみだった。

それを抱えたキッドとだいたい同じぐらいの身長だったから、三分の二スケール程度だろうか。そもそもはリズかパティへの土産に丁度いいだろうと思って取ったものだったが、……まさか、こんな場面で再会することになるうとは。

「で、なんでソレがシートン中に、……ひよつとして、毎晩抱いて寝てんのかよ」  
「……俺がそんな、小さな子供のようなことをすると思うのか？」

別にバカにしているつもりでもなかったんだが、キッドはあからさまに眉を顰めて軽く俺を睨んだ。

その微妙なサイズの死神様は、抱き枕としては悪くなく、寧ろ適していると云っている。が、確かにキッドの言うとおり、ぬいぐるみを、まして父親の形をしたものを抱いて眠るって年でもないだろうしな。

但し、不機嫌な表情を作ってふいとそっぽを向いた、キッドの頬はよく見なければ分からない程度にほんのり赤く染まっていたから、……一度ぐらいは『小さな子供のよう』と一緒にオヤスマしたんじゃないだろうか、と俺は推測するんだが。

言わないだろうから、聞かぬーけど。

そうやって俺が勝手に恋人を慮っている間に、死神様を抱えながらもシートを整え終えたキッドが、やれやれといった調子で苦笑いを浮かべた。

「おおかた、パティのやつのイタズラだろう。……俺とリズを驚かせようとしてか時折、クローゼットに忍ばせたり、バスルームにぶら下げていたりするんだ」



「……ははあ」

その気紛れかつ無邪気な悪戯としか取れない行動が、今日に限っては作為的にあのベッドを選んだのだろうという事を、邪推せずにはいられない。

たとえば本物の死神様の目が届かなくとも、その偶像は可愛いご子息をおはようからおやすみまで見守る最強の番人。視界に入れば間違いなく、やましい気など萎えてしまう事請け合い、……というか実証済みだ。

してやったりといった顔で、きししと楽しげに笑うパティがの顔が浮かんでくる。あのやろう、と思いつながら頬を引き攣らせた俺に、キッドが「で、……続き、と言っていたな」と、どこか嬉しそうに言う。

「え。ああ、……うんまあ、でも」

そんな空気でもねえしました今度、と言いかけた言葉を避けて、キッドはばあっと顔を明るくした。

「やつとその気になったか！ だったら俺も、協力は惜しまん」

「……はっ？」

キッドの突然の歩み寄りに、思考が一瞬フリーズする。

ええと。まあ確かに俺だけ意気込んでてもどうしようもないし、二人の協力が不可欠な行為ではあるけども、だな。そんなに満面の笑みを称えてするような事でもないんじゃない。

変に冷静になつて退いてしまう俺の脳裏で、何を迷う事がある、と囁く声が聞こえた気がした。構わず据え膳を喰つちまえよ、そんな事を告げる煩惱と理性とが脳内抗争を繰り広げるうち、キッドは何故か手にした死神様ぬいぐるみを、徐にベッドの脇に立て掛けた。

……なんの試練のつもりだろうか、それは。コトの最中に目にしたくないものベ  
ストテンに入りそうなものを、わざわざベッドサイドに置く、理由つてのは。

ダメだソウル父上が見てる前でこんな、——なあっていう若干難度高めのプレイ  
が一瞬間を過つて掻き消えた。いや分かつてる。そんなハズがないつてことは。

足りないのは俺の理解力か、それとも集中力だろうか、ともかく色んなシヨック  
でどうにも頭のネジが緩んじまつたらしい。ロクな考えが浮かばず混乱する一方の  
俺を、キッドが熱っぽい瞳で真っ直ぐに見据える。

「ソウル、」

近づくと心配。静かで怜悯な声が、僅かに深みを増して鼓膜を震わせる。ただそれだけで、心臓が跳ねた。胸を叩く鼓動と流れる血液の音が煩くて、他には何も聞かえない。視線はキッドを捉えたまま外せなくなり、意志とは関係なく、自然と足が引き寄せられていく。

……ああ、もう、どうでもいい。お前がそう望むのなら、それがたとえどんな歪な規律だろうと、どれほどの惨苦だろうと俺は――、

「……さて、何から教えようか！ やはり魂学か、それとも一般教養科目か？」

抱き締めようと広げた腕が虚しく空を搔く。

それこそ傍にいたことすら気付いていなかったよう、俺を見事なまでに素通りして、スタスタと本棚の方へと歩いて行ったキッドは、滑稽なポーズのまま固まっている俺にちらと怪訝な目を向けた。

「？ どうした。おかしな顔をして」

そのまま視線を外し、本棚の前で教本を選定するキッドの後ろ姿をしばらく呆けた顔で眺め、そして全てを正しく理解する。

……はいはいはい、お約束お約束、と。

「お勉強会な」

そうだった。今度な、と確かにあの時、約束はしていた。今の今まですっかり忘れていたし、できればずっと忘れていたかったが。

「やる気になったのではないのか？」

厚い辞書を机に置いたキッドが、鉄は熱いうちに打てと言うからな、人も精神が柔軟性に富む若い時代に有益な教育を施さなければ、などと爺むさいことを呟く。

けれどその表情は随分嬉しそうに綻んでいて、……そんな顔をされたらまさか、やる気になっていたんだとは到底言えず。

誤魔化す様に頭を搔いて、口からは自然溜息が漏れた。

「……こりゃ長期戦になりそうだ、と、思いましたね」

「そうだな。継続は力なり、と言うだろう。続けることが大事だ」

噛みあっているのだかいけないのか、分からない会話に苦笑した俺に気付いた様

子も無く、キッドはやがて一冊の教本を手を取った。

「だから、その。……時々はこういう機会を、持ったほうが、いいと」  
「？」

それまでの流暢な物言いが、一変して歯切れが悪くなる。急にトーンを落とした語尾を聞き取れず首を傾げた俺に、キッドはゴホン、と一つ咳払いをする。

「俺は別に、今更学ぶ事もないが。他者に指南する事で自らの水準を維持する、という点では必要なこととも言えるし」

「はア」

「死刑台邸でもいいが……、リズとパーティがいると何かと騒がしいからな。死武専の図書館の方が適しているだろう。気を散らすようなものが無い分、集中して取り組めるし、何より蔵書も豊富だ」

独りごとのよう、一方的に言いきって、キッドはふうつと軽く息をついた。

「つまり、……定期的にお勉強会をしよう、って？」

たったそれだけの、随分と健全なお誘いだ。だのにキッドは先程から俺と目を合

わせようともせず、背けたままの横顔は精神の高揚を表わすように薄赤く色づいている。……うん、そんな思わせぶりの顔されるとまた、何か勘違いしそうになって困るんだわ。止めて欲しい。切実に。

随分と持つて回った言葉を要約したつもりだったが、「先程からそう言ってるだろう」と慥然とした眼差しが返ってきた。……そうでしたっけかね。

釈然としない気分は顔にも表れていたに違いない。俺と目を合わせたキッドの表情が、僅かに曇る。

「……いや。お前の都合もあるだろう、から、……月に一度か、二度程度でも」

少しだけばつの悪そうな様子で言ったのは、先走って話を進めてしまったことに對しての後悔、だろうか。

「いいぜ、そんなぐらいなら」

「そうか」

間を空けず即答した俺に、キッドの表情からは僅かに見えた翳りが消え、どこかほっとしたような様子を見せた。

ただそれだけの事を告げるのに、幾許かの勇気が必要としたのだろうか。拒絶に

対する怯臆と、受容への安堵。そんなものを垣間見た気がして、だから俺は、その言葉の真の意図に気付かざるを得ない。

「……？ どうかしたか？」

「いいや」

緩く首を振って応え、差し出された教科書を受け取る。それは単純に出来の悪い級友に対する配慮であるのと同時に、体の良い言い訳でもあるのだ。

思わずこそりと苦笑する。毎日教室で顔を合わせ時に帰り路を共にして、……けれど死武専という枠を離れても、特別な何かが無くともなんとなく二人で過ごす時間、というものを持つにはまだ俺達の間空気は緩んでおらず、特別なナニかをする程に甘くもなかった、それだけの話。

本来なら理由付けなんざ必要ない、ただ逢いたい、一緒にいたいというだけの至極素直な感情を、こんな形でしか表すことができない俺達は、全く以って不器用極まりない。

「……休みの日まであの長エ階段昇るのは、ちっとダルいなと思っただけ」

けれど、こうして過ぎゆく瞬間と何気ない毎日が、重なる時間がいつか二人の歩幅を、見えない溝を、数え上げるのも面倒な全てを埋めるだろう。楽観とも諦観ともつかないそんな考えに身を委ね、気は進まないながらもぺらりとノートを捲る。

少なくとも、互いの目は互いを捉えている。それだけは間違いないのだから。

「死刑台邸でも、俺は構わないが？」

伸ばした手が触れ合い繋がるまで、この白紙のノートをどれだけ埋めればいいのかは未だ見えないが。

ひとまずはこの持久戦をくぐり抜けるため、時々俺のアパートにしてくれるとありがたい、と根拠地確保のための案を提示してみるのだった。



## > 素晴らしき日常

新刊の後日譚その1。ソウキドの素晴らしく何も起こらない日常風景。何の用もないのに訪ねて行ってもいいものかとか変に躊躇してしまう期間。多分長い。なんらか切欠が無ければ、という。

自分でも知らないところで息子を守ってる死神様（非売品）は、喋ったりもするんだろうか。生ボイス 42 種収録とか無駄に多かったりして、絶妙なタイミングで発動するそれもまたお約束。



## ただの秘密

帰り路に過ぎる、通りに面した小さな公園は、夕刻ともなると遊ぶ子供らの姿も消え、人氣が無く静かなものだった。風に揺られてざわめく木々の葉擦れの音に混じって、キィと遊具の軋む音が辺りに静かに響く。

「……たまには童心に戻ってブランコでも？」

無意識に足を止めていた。三歩ほど先を歩いていたソウルが俺を振り返り、その視線を辿ったあと、冗談ともつかない風で言っただけに笑う。

「そうだな」

応えれば、え、マジで、と自ら提案したくせに驚いたような声が返ってきた。

「ブランコは、三半規管の機能強化と平衡感覚の向上に役に立つそうぞ」

「？」

怪訝な顔をしたソウルに追いついた俺は、そのまま歩を進め公園に寄るつもりは

ないのだという事を彼に示した。

遊具に興じるつもりではなかったが、関連して少し思いだしたことはあった。

「加速度病、……所謂、乗物酔いの予防対策に、な」

そこまで言つてやつと意図を汲みとつたのか、訝しげであった赤い瞳には、僅かに苦い色が加わつた。

いつかの遊園地で、乗車した絶叫マシンは結局四つ目でソウルが根を上げた。

なるべく高低差の激しい、より恐怖感を煽るような物を意図的に選んでいたところはあった。それは列を成すほど人を惹きつけてやまないそのアミューズメント・ライドに、単純に興味があつたというのもあるが、それだけの話でもない。

重力に縛られる人の身には、空中での運動は「自在」というには程遠いものだ。姿勢維持、転回に要する労力は地上での場合よりもずっと大きく、その運動は極めて制限されたものになる。

ソウルはジャクリーンのような飛行のための能力を持っている訳ではない。ただ、彼のパートナーであるマカの魂が、極めて珍しい特性を持っている以上、いずれ何

らかの形でソウルがそういつた力を会得する可能性は充分にあり得るだろう。受動運動と能動運動との差はあれど、浮遊感と緩急の激しい揺れ、加速減速横G等に対して耐性を付けておくのは悪い事ではないだろうとも、思ったのだ。あの時は。

元々のコンディションが思わしくなかったのだと、言い訳めいたことを述べたソウルは、傍から見ても明らかかなほどにぐったりとしていた。高所恐怖は無いようだが、大方、普段からの体調管理がなっていない所為だろう。

だらしないなども、あまり心配をかけさせるなどとも思い、けれどそう言ってしまうのも酷な気がして言わずにおいた。多少は気が咎めたのだ。結局、それは彼が俺の希望を全て通したが故の結果でもあったから。

「……そんな事あったっけか」

目を伏せ、きまり悪そうに頭を掻く。あのデートから、そう経ってはいない。本当に忘れたわけではないのだろうが、しかしどうやらソウルにとってあの時の失態は、思い出したくないもののひとつに入るらしい。

常日頃の意趣返しの意味を込めて、「もう忘れたのか？」と話を切り上げようとするソウルを迫撃した。健忘まで加わるとは厄介だな、ほらお前がアトラクションを降りて青い顔をした時があったじゃないか、何なら写真でも見れば思いだすか。そう言つてやれば、機嫌の悪そうなじとりとした視線でこちらを見ていたソウルの瞳が、訝しげに細められる。

「……写真？」

「撮られただろ」

「……………！ 買ったのかよ！」

一瞬の間を置いて、驚愕へと表情を変化させた彼に、無論だと応えた。ソウルは暫しその真偽を判別するように俺を凝視し、やがて言葉を探して開きっぱなしだった口からは「何でまた」と、理解できないと言いたげな呟きが漏れた。

最高所から傾斜を走り下りる瞬間の、所謂、絶叫ポイントと呼ばれる場所で撮影された写真を、降車時に購入するのがスリルライドの定番らしい。

随分と青い顔をして、覚束ない足つきで先に行ってしまったソウルの代わりに、折角だから一枚買い求めておいたのだが、そういえばあの写真も白紙のレポート

用紙の束と共に机の引き出しに仕舞ったままだ。

二人で撮った写真、と言えなくもないから、ソウルに譲渡しても構わない物ではある。色々とあつて切り出す機会が無かった、というのも勿論あつたが、

「……買うかア。よりもよつて、アレを」

それが彼にとつて好ましいものではないということは、声の調子からもはつきりと分かる。こういう反応をされる事が目に見えていたから、敢えて黙っていたという所も、無くはない。

さして面白くもなさそうな顔をした俺と、隣に座るのはお世辞にもアトラクションを楽しんでいるとは言い難い様子の、明らかに顔色の悪いソウル。二人とも正面からの突風を受けて髪は派手に乱れているし、まあ正直とても人に見せられたような写真ではなかったのは確かだ。

けれど重ねる時間と積もりゆく思いと、全てはいずれ変容し失われ、だから人は記憶を記録として残すのだろう。いつか過去に思いを馳せる時、印画紙に焼きついた光景はきつと、感傷だけではなく笑みを引き出すものとなるのだろうか。

「いい記念じゃないか。狙つても撮れるものじゃない、あんな顔は」

うん、記念だ。

その言葉の響きが気にいって、少し口元を緩めた俺に、ソウルの恨めしげな視線が刺さる。

「記念って、……だったら、もうちつとマシなのにしるよ。あんな、COOLじゃねエやつを何で、」

「だからいいんだ」

言葉を途中で遮られる形になったソウルが、何かを問いかけようと再び口を開きかける。その鮮やかな赤い双眸を、無言で覗きこむ。

「……、……？」

じつと見詰められて、一瞬怯んだソウルに、満面の笑みで応えてみせる。いくつもの疑問符を抱えていたはずの彼は、それで完全に気を削がれた顔になる。

クールを気取どっているくせに、その実、己の予想範疇外の事態に存外弱い所がある。それも最近になって知ったことの一つだった。

そのまま啞然とした様子でその場に立ち尽くすソウルに背を向け、彼と距離を取るように、足早に公園の横を過ぎる。

「ちよ、……キッドッ」

しばし間を置いて、名を呼ぶ声と、小走りに近づいてくるソウルの足音。

口元を隠す様に抑える。追いつかれる前に収めなければと思うのに、どうにも笑みが零れて止まらない。

思い出すのはあの写真の、直下降の衝撃に備えて引き攣った彼の顔。そんな情けない表情だって、——俺しか知らないものだと思うと。これもまた二人で重ねる秘密のひとつなのだ、愛しく思えるんだ、なんて。

言えないのだ、いまは、まだ。



### >ただの秘密

新刊の後日譚その 2。園内で写真撮ったよねっという設定を投下頂いた夕子さんに以下略。COOL な彼氏の COOL じゃない一面を思っにやにやするキッドさん。

寝不足だと酔いやすいみたいです。

不可解に見える行動にも何らかの思惑があつてのことカモネーという意味での付け足しでもあり。概ね善意（＝自分の為）だったりしてソウルはやってられない。



Special Thanks :

c-so よねもり夕子様

[ "Make a Secret"  
extra chapter ]

2011.08.21 quadra / ONO

web >>

<http://blue.zero.jp/quadra/>

mail >>

[quadra88@gmail.com](mailto:quadra88@gmail.com)

twitter>>

[http://twitter.com/qd\\_ONO](http://twitter.com/qd_ONO)

■無断複写転載禁止

colophon